

SY2-4

学校における児童虐待への対応力を向上させるための「チーム学校」づくりについて

稲葉 薫

東京都教育庁教育政策担当

「チーム学校」という言葉をお聞きになったことがあるだろうか。現在、学校組織には、校長・副校長といった教育系管理職のもとに、各教科の学習を担当する教員、養護教諭、栄養職員等に加え、学校種別にもよるが、看護師、スクールカウンセラー(SC)、スクールソーシャルワーカー(SSW)といった多様な職種の専門職が配置されている。さらに、医療職という点では、長引くコロナの影響もあり、子供たちの心身の健康を支える学校医・学校歯科医、学校薬剤師等の支援も欠かせない。

学齢期の子供たちにとって、学校は家庭と同じくらい重要な居場所である。しかし、子供たちの中には、勉強が理解できないといった教科学習上の課題のほか、友人関係の悩みや不登校、いじめなどの学校生活上の問題を抱えている子供がいる。また、児童虐待や貧困、ヤングケアラーなど、家族関係や家庭生活上の課題に悩み子供たちもいる。こうした子供たちが抱える課題が複雑・多様化することに伴い、これまで学校に配置されていた教員系の職員だけでは十分に対応できない事態が生じてきた。このため、冒頭に記載したような福祉系の職員が配置され、チームとしての対応が必要とされるようになってきた。

過去の時代の子供たちにも現在のような課題はあったという指摘もあるが、少子高齢化や近隣関係の希薄化、核家族化など、子供や家庭を取り巻く社会状況の変化によって、家庭や地域の養育力の低下や子育て家庭の孤立が生じ、その影響が子供たちに及んでいる。

今回のテーマである児童虐待への対応は、学校が、期待されている役割をまだ十分には果たせていない分野である。「チーム学校」が真に機能するようになるためには、学校組織の構成員である各専門職が、それぞれの専門分野の資質・能力を相互に理解した上で、学校の内外の関係機関と連携しながら、まさにチームで対応していくことが求められる。現時点では、SSWが少数職種である上に常勤配置となっていないことが多い。このため、担任や養護教諭などの教育職員と連携しながら、管理職である校長、副校長が適切に関わる中で、組織的対応ができる環境づくりが求められる。その場合にポイントとなるのは、教員系職種と福祉系職種とが、子供を中心に据え、専門性や立場の違いを超えて、お互いに支援チームの一員として協働できるかどうかである。

また、SSWの仕事は、学校の職員という位置づけの中で期待される役割と、ソーシャルワーカーという専門職として果たすべき役割とのギャップから生じるジレンマにもさらされている。すなわち、学校がSSWに求めていることは、必ずしも子供たちが抱える生活課題全般に対応することではなく、児童・生徒の学習する権利が阻害される場合に、その社会的要因を含む課題を福祉的な手法で解決するために活動することに主眼が置かれていることが多い。これは決して児童福祉分野だけの問題ではなく、高齢者福祉や障害福祉等の分野でも同様であり、組織に属する専門職の誰もが感じているジレンマでもある。

就学前まで母子保健や保育関係者が見守ってきた子供が、生活の場が学校に移行すると同時に状況が見えなくなり、大きな問題が生じて福祉部門に戻ってくることもある。しかし、学校に福祉職が入り、教員たちの間にも福祉的な視点が浸透すれば、子供たちの学習を保障しつつ、虐待をはじめとする様々な課題にもいち早く気付いて支援につなぐことができるようになる。学校の教職員が、自分たちの役割の重要性を十分に理解することで、学校は、子供たちの成長を支える場として機能し始めるのである。学校が今後そういった場として力を発揮できるよう、医師の先生方には、「チーム学校」の背中を押し続けていただきたい。